



## これからの予防接種

第二次世界大戦後、1948年に予防接種法が制定され、それ以降わが国における感染症は激減しました。1970年以降に生まれた人は、麻しんや水痘といった昔なら子どものときに誰もがかった感染症にかかることなく大人になった、いわゆる予防接種世代であります。

予防接種世代が親世代になった近年、乳児健診等で水痘や麻しんに罹患した赤ちゃんが散見されるようになってきました。少し前までは、乳児といえば母親からの移行免疫で6か月過ぎるまで大きな感染症には罹患しないというのがわが国の常識だったものです。また、子どものポリオ予防接種後に親が感染、麻痺を生じた事例も記憶に新しいところです。

2007年には、関東地方を発端として、10代、20代の若年者を中心に全国で麻しんが大流行しました。初発患者の多くはワクチン未接種者でしたが、子どもの頃に麻しんワクチンを接種していた人や、昔麻しんに罹患した30代、40代にまで感染が拡大したことから、麻しんは終生免疫という常識が覆されました。

これは、感染症が激減し、ブースター効果が期待できない現代においては、予防接種世代はもちろんのこと、昔り罹患したことがあっても、年数が経つと免疫力(抗体価)の低下が避けられないことを示唆しています。これを機に、2008年より5年間の時限措置として、MRワクチン2回接種の対象に中学1年生、高校3年生に相当する年齢が追加されました。

今やわが国においても、感染症対策において先を行く欧米諸国同様、生ワクチンの複数回接種など予防接種の強化が必要な時代になっていると言えます。予防接種については本誌2006年4月号(70巻4号)にて特集しましたが、その後も予防接種を取り巻く状況はめまぐるしく変化しています。

本特集では、昨今の感染症の発生状況、ワクチンの進歩、国民の意識などの最新情報に基づき、これからの予防接種のあり方について考えます。